

437 妊娠12週における早期羊水検査に関する検討 — 経頸管的絨毛検査との比較 —

虎の門病院

宮川智幸, 田中千晶, 浅井智子, 坂本公彦,
小竹 讓, 塩田恭子, 古屋 智, 高橋敬一,
横尾郁子, 伊豆田誠人, 佐藤孝道

[目的] 妊娠12週時の早期羊水検査(AC)の診断・安全性について経頸管的絨毛検査(CVS)と比較検討することを目的とする。

[方法] 染色体分析を目的として妊娠12週時に施行したAC98例(1993年—1997年)とCVS119例(1989年—1998年)について, 診断精度・妊娠予後などを比較検討した。AC・CVSは, 遺伝外来にて十分な遺伝相談を行った後, 希望する患者に行われた。検査の適応はACはほとんどが高齢妊娠であったが, CVSでは両親のいずれかの均衡型転座であった例が最も多く, ついで高齢妊娠, 前児染色体異常の順だった。ACでは12mlの羊水を吸引し, Changのmediumを用いて培養した後, G分染法を行った。CVSは経頸管的にカテーテルを挿入し, 吸引して採取した。統計学的解析にはt検定およびカイ二乗検定を用いた。

[成績] 患者の平均年齢は, AC群 36.2 ± 5.7 歳, CVS群 32.7 ± 5.0 歳で, 有意にAC群で高かった($p < 0.01$)。平均妊娠週数はAC群が 12.4 ± 1.3 週に対し, CVS群が 10.5 ± 0.8 週であった($p < 0.01$)。検体採取不能例はAC群で6例(6.1%), CVS群2例(1.7%)であった。培養不良例はAC群, CVS群とも1例ずつみられた。両群とも誤診はなかったが, CVS群では7例で母体組織の混入が疑われ, 羊水検査による確認を行った。妊娠22週未満のfetal lossはAC群1例(1.0%), CVS群1例(1.7%)で有意差はなかった。妊娠22週以降でのfetal lossは両群ともなく, 健児を得たが, AC群では7例で早産(妊娠34週~36週)が認められ, 有意にCVS群よりも多かった($p < 0.01$)。

[結論] 妊娠12週における早期羊水検査と経頸管的絨毛検査は, 診断精度・安全性に関してほぼ同じと考えられた。

438 母児のダイオキシン類による汚染の実態 — 胎盤・臍帯血・母体血・母乳中の濃度測定結果から —

大阪医大, 新香里病院*, 摂南大薬学部**
折野一郎, 亀谷英輝, 坪倉省吾, 植木 實,
池田義人*, 太田壮一**, 宮田秀明**

[目的] 最近, ダイオキシン類の環境・人体汚染による健康被害影響への社会的関心が高まる中, 産婦人科領域においても流・早産率の増加や催奇形性, 子宮内膜症の増加などの関連性が指摘されている。しかし, 母体や胎児への汚染実態はまだ十分に解明されているとはいえない。今回われわれは胎盤・臍帯血・母体血・母乳中のダイオキシン類を分析することにより, 母児の汚染実態の解明を試みた。[方法] 1998年2月~1998年9月に経膈分娩により正期産の妊婦10名を, 患者に同意を得た上で対象とした。試料として臍帯血50ml, 胎盤組織200g, 母体血は分娩後の出血液50ml, 母乳は産後1ヶ月目までに50mlをそれぞれ採取した。測定は上記試料に¹³Cラベル化内標準物質を添加後, ダイオキシン類を抽出, 精製し, 高分解能GC-MSにより定量分析を行った。

[成績] 各試料中の濃度(PCDDs+PCDFs)としては, 脂肪1g当たりの2.3.7.8-TCDD毒性等価量(TEQ)換算で, 胎盤68~80pg(平均74.3pg), 臍帯血40~48pg(平均44.0pg), 母体血22~37pg(平均29.5pg), および母乳17~34pg(平均25.3pg)であった。注目すべきことには, ダイオキシン類は, 母体血よりも, 胎盤や臍帯血に高濃度に蓄積している傾向が示された。この結果から, 胎児は母体から血液を介してダイオキシン類による汚染を受けていることが示唆された。[結論] ダイオキシン類は胎児期より高濃度に移行している可能性があり, 今後, 催奇形性や流・早産, 周産期における児への影響などについて一層の検討が必要と思われた。